

## 武蔵野日曜講筵 復活節

## キリストの霊体

## ——ルカ伝第24章36節～43節——

1990年4月15日

小池辰雄

「時」とは何か 永遠の今 ヤイロの娘 ナインの若者 ラザロの復活 十字架と復活 キリストの霊体 「35/53」 第二の宗教改革 大調和 キリストさま、万歳！ 福音の証者 祈り

## 【ルカ24】

36 此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』と言ひ」給う。 37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、 38 イエス言ひ給う「なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、 39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし」 40 「斯く言ひて手と足を示し給う」 41 かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言ひたまふ「此処に何か食物あるか」 42 かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、 43 之を取り、その前にて食し給えり。

## ●「時」とは何か

今日は復活祭です。復活祭はその年によっていろいろ日がちがうわけで、3月22日以後の満月の次の日曜日ということですよ。

この頃、私は不思議な夢を見てしようがない。私は夢の中で火渡りをやってしまったり、しかも、凄い火だよ。また、鉄の真つ赤に焼けたのを手に持って、手が焼けないんですよ。まあ、驚いたね、この夢には。夢だけれども、なにか非常に霊的な現実に思えた。今度は、霊界を歩いている夢を見た。なにしろ、もう私は詩の世界を現実として持っているものだから。ダンテさんやゲーテさんを相手にしている。とにかく、いまだこんな次元に来たことがないように思えるような夢の世界ですよ。

## 「老いたる者は夢を見る」

なんて、ヨエル書に書いてあるけれども。御霊によってね。

今日は、「キリストの霊体」という——何十回と復活節を迎えたけれども——こんな直接的な題は初めてです。

私はもう伝道五十年とかいって、歳は86で、非常な過去を持っているわけだ。それから、地上の未来は何年か知りませんが、とにかく、過去ほど長くはないことは明瞭だ。



一体、「時」とは何か。これはアウグスティヌスが『コンフェッシオ』（告白）の第11章でなんのかんのといろいろ書いてます。けれども、アウグスティヌスも本当の結論には行っていないね。

「現在」というと、「現在」と言っているうちに過去になつてしまふ。一体、「現在」というのはあるか。「現在はない」と、アウグスティヌスも言ってます。

「現在には場所がない」

と。「今」と言っているうちに、「今」はすぐ行つてしまふ。一体、「現在」というのはあるのか。一体、「過去」というのもあるのか。思われている世界ではないか。「過去」もないではないか。「未来」というのはあるのか。「未来」というのは想像しているもので、これも「未来」という時が一体あるのかと。結局、時がなくなつてしまふ。一体何だということになる。過去もなければ、現在もなければ、未来もない。時とは何ぞやと。妙なものだね。

私は現在というものを、「流刻」、流れる刻ときと言いたい。とにかく、流れている。未来から過去に向つて流れているひとつの瞬間。しかし、我々が常識的に「現在」というときには、ある時限を現在と言っているんだけど。妙なものだね、これ。

仏教の世界ではあまり時を問題にしない。ところが、福音の世界では、「神の歴史」と言っている。時間・空間と言う。空間はこの大自然。時間はこのいろんな事象が展開していくところの場だね、見えざる場だ。ところが、神さまは永遠の過去から——常識的な言葉ですけれども——永遠の未来にわたる。

「永遠」という言葉がある。過去・現在・未来にわたつて、無限の長さを持っている。ところが、無限の長さを持っているものが果して永遠かと。神さまは創造をなさった。創造をなさったという時限、その時刻、そこから時が始まった。歴史が始まった。そして、これは宇宙の完成へ向っている。創造から完成に向つて、創世記から黙示録に向つて。まあ、聖書というのは大変な本だよな。

だから、歴史はひとつの時限です。歴史の終り、終末から、今度は永遠の世界へ。永遠から永遠の世界に入る。その間はこの歴史、人類の歴史だ。大したことないよ、人類の歴史なんてものは。そうすると、そういう考えから見ていると、我々はまことにはかない。儂いという字は人の夢と書く。それでまあなんのかんのとやっているわけだ。

## ●永遠の今

ところが、福音の世界に入ると儂くないんです。永遠は質です。不滅なるものなんです。神さまが持つていらつしやるところの不滅なるものの現実です。不滅なる現実が「今」という。あるいは、そこで少し過ぎ去つてしまふかもしれない。また来るかもしれない。過去も現在も未来も、永遠は掌握している。だから、我々が今こうやって、語りまた聞いているところの現在というものは「永遠の今」である。滅びない。過ぎ行くけれども滅びない。



永遠というものは不滅なるものである。質的に不滅なるものです。神さまの生命、神さまの生きていらつしやるところが永遠の事態、永遠の現実。

だから、神を持たざれば、神において生きなければ、我々は永遠を生きるということはないんです。いつ死んでも構わない、死なないという永遠。そのことを実証したただ一人の人がある。ナザレのイエス・キリストです。キリストは永遠の生命です。

「アブラハムより先にありしなり」

「我を信する者は死ぬとも生きる」

という。永遠の生命というものは、キリストが実証した。これはヨハネ伝に書いてあるとおり。だから、キリストを持つ者は永遠を持つ。そして、永遠の現在に生きる。生きています。我々にとつては、現在は永遠的な質を持っている。決して過ぎ行かない。時間に過ぎ行つても、それは儂くはない。そして、キリストにあつては、どんな過去をも全部これをプラスに変えることを知っている。

「ああ、まちがった。しまった。いやあ、とんでもないことをした」

と、いろんなことがあるよ。しかし、それが逆に変質されて体験されていく。ゲートルが、

「単に過去を持つたつてしようがない」

と言つた。ゲートルは、過去を現在化するところの気持を持つていた。さすがにゲートルです。我々は楽しくてしようがないというのは、永遠を生きているからなんです。

「躓いても転んでもいいよ、くよくよするな」

と。いよいよ全部を、あらゆる体験を全部プラスに変えていくことを知っている。キリストの力によつて、贖いによつて。善だの悪だの、清いだの清くないだのと、そんなことをゴタゴタ言つている必要はない。この御霊の世界はもの凄い世界です。

「相対的な判断しているうちはダメだ」

と柳宗悦も言っている。そのとおりです。

そのイエス・キリストという方は桁違いな人です。お釈迦さんがどんなに偉くたつて、キリストだけははつきり、桁が違ふんです。そのキリストに圧倒されて生きてくださいよ。問題はありはしない。私はどう人に言われようと、なんと扱われようと、一向平気だ。キリストに圧倒されて生きているから。本当だよ。

## ●ヤイロの娘

「復活」なんていつたつて、また息を吹き返したなんていうものではないんです、このキリストの復活というのは。

私の著作集第一巻『無者キリスト』と第十巻『聖書は大ドラマである』は本当に大事な本です。自分で言つたらおかしいけれども、自分で読み返しては、私は学んでいるんだよ。皆さんは私の話をこうやって聞けるから、あまり私の本は読まないでしょう。向こう側に



逝くと、今度は読まなくてはならない。そんなものだよ。だけれども、今のうちに読んでくださいよ、私のラブレターだと思つて。火のような手紙だから。

この第一巻に、ヤイロという会堂司の娘がキリストに復活させられたことが書いてある。マルコ伝5章21節から43節、ルカ伝8章40節から56節のところですよ。

「私の稚<sup>おさ</sup>ない娘がいまわのきわにおります。どうぞいらつしやってみ手を<sup>お</sup>按<sup>お</sup>ってください！ そうしたらきつと救われて活きます」

と。12歳ほどの少女だったね。

その前に、そのあいだにまた、12年血漏を患った女がキリストの衣に触つただけで治つてしまつたりした。まあ大変なひとですよ、キリストの霊体というものは。キリストは普通の肉体だけれども、肉体の中にもうキリストの霊体がそこにちゃんと生命<sup>いのち</sup>している。もうその少女は死んで、みんな泣いている。

「何でそんなに騒いだり泣いたりしているのです。子は死んだのではない。眠つていただけだ」

と、キリストはそんなことを仰つた。

「タリタ、クミ！」（乙女よ、起きよ！）

と。この一言のもとに起き上がってきた。

「キリストを信ずる」

なんて言つたつてね、我々は本当にキリストを——「信ずる」必要はないんです、なにも——からだで受けとれ、体<sup>てい</sup>受<sup>う</sup>せよということ。全存在<sup>ぜんざんざい</sup>でキリストを受けとる。キリストの中に自分を<sup>お</sup>投<sup>な</sup>げ<sup>な</sup>込<sup>め</sup>む。

いつも言つているとおり、投げ入れが、全身を投げ入れることが「祈り」です。なにかお願いするのではない。投げ入れて、そこから具体的なことを祈つたらいい。具体的なことを祈る前に、まずキリストに自分を投げ入れなければダメですよ、福音書のキリストにね。昔も今も同じこと。まあ、大体が観念的な信仰ばかりだよな。自分がヤイロの娘になればいい。

「タリタ、クミ！」

と。聖書の言葉は、それ自体が

「わが言は<sup>お</sup>霊<sup>たま</sup>なり生命<sup>いのち</sup>なり」

でしょ。意味ではないよと。

「私の言は<sup>お</sup>霊<sup>たま</sup>であり生命<sup>いのち</sup>であるから、聖書を読むときに、その言の背後から霊なる生命を、その言自身において霊なる生命を受けとる読み方をするまでは、本当は読んでいない」  
 ということになる。

「これはどういう意味だろうか。こんなことがあるだろうか？」



なんて言っているうちは、いつまでたっても始まらない。  
 「果してこれはキリストの言葉だろうか？」  
 なんて、そんな研究したってどうにもならん。だから、  
 「聖書の研究会なんてなもので聖書の世界には入れません。全身でとつくむ世界だ」というわけです。

### ● ナインの若者

その次は「ナインの若者」です。ナザレの町の南東の方のタボル山のまた南の方に、エストラエロン平原の東の街道沿いにナインという所がある。その若者が死んだ葬式の行列が動いていく。お母さんが——寡婦のひとだね——その横を歩きながら泣いている。キリストが、

「泣きなやめるなよ」

と、<sup>ひつぎ</sup>柩に手を<sup>お</sup>按いた。柩に<sup>お</sup>按手して、

「若者よ、おまえに言う。起きよ！」

と。これは死んだその若者が起きて、柩の中から出てくるという話だ。こんなことがありますか。誰ができるですか。まあ大変なかたです、キリストというひとは。

永遠の生命というのは、さきほど言ったその「永遠」ということは、キリストを持つ者が永遠を持つ。キリストと一つにならないかぎり、永遠はない。思われた永遠ではどうにもならん。

「現在において永遠を生きている」

というのが我々の生命である。この生命は復活せざるをえない。そういう盛んなる世界です。

「大預言者が現れた」

なんて言っつて、みんな驚いた。預言者どころのさわぎではない。旧約のいかなる預言者もこのことだけはできない。ただエリシヤというやつは凄いやつだ。墓に死人を投げ込んだら、エリシヤの白骨に触れてその死人が甦えつたという。

もう皆さん、何も行き詰まらんですよ。人生何が起きようが、どうなるうが、さっぱり行き詰まらん。

「私は永遠を生きていますよ。何とでも扱ってください」  
 と。どっかいというわけだ。

### ● ラザロの復活

それから、「ラザロの復活」という有名な話。マリヤ、マルタの兄弟だ。これが死んでから三日目、そろそろ死体がおかしくなったなんていうころ。ヨハネ伝11章の1節から46節に書いてある。レンブラントの有名な絵があるね。ラザロが布に包まれながら出てきた。



イエスは目を挙げて、天をのぞみこう叫んだ。

「父よ、私に聴いてくださったことを感謝いたします。いつでも聴いてくださることを存じております。このように申すのは、傍らに立っている群衆のためであつて、あなたが私を世に遣わし給うたことを人々に信じさせるためです」

なんてことを言われた。まだ、「ラザロよ、出でよ」と言う前に、

「既に聴いてくださったことを感謝します」

と先取りして言っている。

「祈りたることは聴かれたりとせよ」

とキリストが言われた。そのとおりです。そして、

「ラザロよ、起き出でよ！」

と言ったら、ラザロが出てきた。大変だね、キリストの言にはもの凄い霊的な力がある。神の力です。キリストに聞けば、

「私はなにも力はないよ、神の力だよ」

と仰る。

いつも申し上げているとおり、イエスという方は自分を「ゼロ」にしている。そうすると、神という「無限大」である。これが本当の「無者キリスト」ということです。無者キリストは、無限者キリスト、無量者キリスト、無尽のキリストです。

「無者」

なんて言うと、みんな躓くんだよな。

「なにか無に悟り澄ました境地か」

と思つて。そんなことではないんだよ。いわんや虚無ではない。だから、私はキリスト教界に除け者にされている。結構でございます。キリストの直弟子の次元にいよいよ入っていくだけのはなしです。

「ヤイロの娘」と「ナインの若者」と「ラザロ」と、この三つの驚くべき事態をもつて、キリストがいかに驚くべき生命体で、霊的、生命体であることを、その御言が

「霊なり、生命なり」

であることを、文字通りそうであることを実証されている。

### ● 十字架と復活

本当はもういきなり天界にキリストは行きたかった。

「この苦杯を本当は飲みたくありません。けれども、あなたの御意みこころによつて」

と。彼はゲッセマネの祈りでそこを突破されて、そして——ローマの兵隊なんか恐くもなんともない——捕まって、さんざんな目にあつて十字架にかかった。



「民の長老たち、祭司長たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔をされ、弟子の長ヘテロにすら呑まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、極悪人と同列に置かれ、悪口雑言を浴びせられ、唾せられ、鞭打たれ、荊の冠をかぶせられ、血の雫と汗にまみれ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十キロもある十字架を負わせられて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ、髑髏の丘へと、ヴィアドロロサ「苦難の道」をよろめき辿りゆくイエス！」

人間の、人類の、世界の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、反逆の悪魔的、闘争的、擾乱的実相の逆徴が、イエスの十字架を負うこの姿に逆写されている。」（小池辰雄 著作集第一巻『無者キリスト』第一部第六転「十字架」の項）

人類の救い主がもう極まりなく。ドストエフスキーの小説もこのキリストの現実を描きだすことができない。ドストエフスキーもさんざんな体験をしました。だから、あの深刻な小説ができたけれども。

これが日曜の朝に復活した。弟子たちは始めは信じなかった。マグダラのマリヤが言ったけれども、

「そんなことがあるか」

てなわけで。イエスは「甦える」と既に三度も預言しておられるのに。まあそんなものだね。七つの悪鬼を追い出されたマグダラのマリヤが一番キリストにしがみついた。あのナルドの香油の壺を割って頭から注いだ。私はこれはマグダラのマリヤだと思っています。足元に注いだ例も他に書いてある。女の方だからいろんな、同じようなことをしたのでしょう。しかし、頭から注いだのは彼女一人です。葬りの予表を予めそのことをした。だから、

「福音の伝えられるところ、全世界にこのことは言われる」

とキリストは言われた。ただ一つ、キリストの気持をあこの時にマグダラのマリヤは受けとったわけだ。

惨憺たるキリストの体だけれども。血は全部地面に吸い込まれてしまった。ところがどっこい、甦えつて霊震が起きたね。ローマの兵隊は逃げて行ってしまった。地震ではない。あれは霊震だ。

## ●キリストの霊体

そこで、ルカ伝の終りのところに行きましょう。24章36節から、

「<sup>36</sup>此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』と言い」給う。<sup>37</sup>かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、<sup>38</sup>イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑おこるか、<sup>39</sup>我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我には



あり、汝らの見るごとし』<sup>40</sup>〔斯く言いて手と足を示し給う〕<sup>41</sup>かれら<sup>よろこび</sup>歡喜の余に<sup>あまり</sup>信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』<sup>42</sup>かれら<sup>あふ</sup>炙りたる魚一片<sup>ひと切れ</sup>を捧げたれば、<sup>43</sup>之を取り、その前にて食し給えり。』  
(ルカ24・36～43)

「キリストの復活体は我々の理性の次元をはるかに越えた靈性の体现である。可視、不可視自在の在り方をなし給う。而も復活のキリストが一片の魚を食べたとは!」(小池辰雄著作集第十卷『聖書は大ドラマである』11月3日の項)

と。たつた二行を私はここに——解説ではない——ただそれだけのことを書いた。こここのところは普通、神学者も牧師さんも信じません。あるグループでこここのところを読んだら、みんな笑った。その神学のグループはみんな一流の学者みたいなご連中です、六、七人。私もその一員だったから、それからもう辞めた。そのグループから出た。

キリストの霊体がお魚を食べた。これは宗教物語として、普通とりあつかっている。私はまだ平伏だけです。信ずるとか信じないとかいうのではなくて、ただ平伏し、降参するだけです。そうすると、そういう世界に私たちを入れてくださる。出現自在だ。

「幽霊ではないぞ。本当の霊体だぞ」

と。パウロがコリント前書15章に言っている霊体、靈の体、靈質のからだ。大体、閉じている所に入つてらつしやるんだからね。なんとか光線以上だよな。まあ地上にあるときから、彼はもう天国体なんです。そして、天国を現しながら歩いておられた。目の見えない人は見えるようになったり、耳の聞こえない人は聞こえるようになったり、跛者が立つてみたり、死人が甦つてみたり。これ天国の現実です。

### ●「35／53」

だから、言っているでしょ、イザヤ書35章をキリストは実現なさったんだと。

「イザヤの預言は、旧約の言っていることは、みんな私の預言だよ」

と。そのとおりです。イザヤ書53章は、さつきから学んできたところの十字架です。だから、「35／53」(53分の35)

と言う。イザヤ書53章と35章。「35／53」(53分の35)とは何ぞや。イエス・キリストのことなり。「53」(イザヤ書53章)は十字架、「35」(イザヤ書35章)は聖靈の世界です。十字架と聖靈は離すことができない。バラバラにしているから、いつまでたっても始まらない。あなた方は耳にタコができるくらい聞いている。私は言うたびに新しい。ただ繰り返しているのではない。

まあ、イザヤ書というのは大変なところだ。楽しいよ、イザヤ書というのは。私はイザヤ書のために五つの賛美歌をつくったでしょ。歌ってくださいよ。私は時々、あれを自分で歌っている。



(註 A 30 「いとも聖なる」(1983.6.23)―イザヤ書1〜36、36〜39章、A 31「曠野の如き」(1983.2.1)―サフランの歌、イザヤ書34〜35章、A 32「イスラエル・ユダの」(1982.8.28)―イザヤ書40〜48章、A 33「主なるキリストは」(1982.11.5)―イザヤ書49〜55章、A 34「み霊の主イエスに」(1981.8.10)―イザヤ書56〜66章)

「復活は一体、あつたんだらうか。どういうようにして復活したんだらうか？」

なんていう研究や本が昔はよくあつた。そんなものはみんないらぬ。聖書の記事に、「参りました！」

と降参すれば、その世界に入つてしまふ。それだけのはなし。地上のキリストの肉体よりも、「我を見しものは父を見しなり」

という、今度は天界に今、現に生きていらつしやるところのキリスト、御霊のキリスト、キリストの御霊。それと一つになる世界が

「エン・クリスト」(キリストの中に)

という世界です。そうでなければ、信仰ではないんだよな、「信仰、信仰」なんて言つたつて。

## ●第二の宗教改革

第二の宗教改革が始まつているんだ、あなた方を通して。ルターが言つていることを現実にいよいよよしている。パウロの言つていることを。ルターも、

「パウロの福音に帰れ、帰れ」

と一生懸命で言つている。ルターはパウロが大好きだつた。まあパウロというのは大変なやつですよ。ヨハネはあまり苦難に遇わない。これはパトモスで啓示をうけて、大事な黙示録を書く使命を持つていた。

あなた方一人びとりの生涯はそれぞれの特長性をもってキリストを証するためにある。さつきのルカ伝の一番終りに書いてあるでしょ。

「汝らはわが証人なり」

と。キリストの永遠の生命をあなた方の実存を通して証することが「証人である」ということ。

「キリストは復活しました」

なんていうことをただ言つていることが証人でも何でも無い。劇を通し、歌を通し、何を通しても、みなそれぞれのことを通して――ただ

「不思議なことをせよ」

なんて言つていゝるのではない――生活そのものがこのキリストの直弟子の次元に行くことが大事です。そうすると、不思議なことを時によつて、神さまは、キリストは起こしたもう。

本当に十字架を受けとれば、聖霊は来ざるをえない。単なる悟りの世界とはちがうんです。福音の世界はもの凄く生命的な世界です。一人でその中に祈り入つてごらん。もの凄く霊



動が始まるから。へたすると異言が出るから。

私は今度の『エン・キリスト』42号の5頁のところに、「宗教大国への道」という題で二頁書いたけれども、一番終りに、

「1950年の秋、大阿蘇に驚くべき聖霊の降臨があつた。爾来原始的使徒的、十字架・聖霊不可分の新宗教改革の火が燃えつづけている。」と書いた。どこかで燃え続けているのではない。あなた方です。

とにかく、キリストの生命は厳然たるものである。「げんぜん」は現然と書いてもいい。本当の真理の世界に入ると、自然にこういう表現が出てくるんだね。あなた方は、もうはち切れそうでしょうが。こういう福音をいい加減にしていられるかというんだ。だから、

「日曜日は集会に来なさいよ」  
と言っている。私は習慣でやってやしないんだから。一回ごとに、

「本当の生命の世界に入りましょう、キリストと一つになりましょう」と、やっている。

だから、私は「お父さまー！」と言って祈らないんです。

「主さまー！」  
と言って祈る。キリストの他にしようがないもの、私は。キリストは、

「お父さま」  
だよ、それは。「主の祈り」で、かく祈れと言うと、みんな「お父さま」と祈る。わるくはないよ、「お父さま」で。パウロもそう言っているんだ、

「聖霊を受ければ、父よと言える」  
と。結構です。あなた方も「お父さま」と言っているですよ。ただ私は「主さま」と言わざるを得ないから言っているだけのはなしです。

### ●大調和

「みんなそういうふうに言え」  
なんて言っているのではない。私はあなた方の自由を尊重しますから。小池の真似なんかしなくていい。それぞれで結構です。みんな天下一品につくられているんだから。人真似はいらない。ただ、

「たまたま、ひとつになりました。同じことになりました」  
というなら、それだけのはなし。原始福音の方では、女の方の髪の結い方が大体似たようなことらしいけれども、そんなことはここでやってない。みんなそれぞれで結構です。

流行を追ったらダメですよ、日本人は流行のものが好きだね。あれはコマースヤリズムにかき回されているようなものだ。自分の好きなもので結構です。そうすると、

「あの人は古い」



なんて、そういうことを言うからいかん。

「常に新なり。<sup>あらた</sup>私のは古びないんです」

と、はつきり言つてやればいい。ギリシア語で言つてやれ、

「古びないカイノスの新であつて、古びてしまふネオスではないぞ」

と。それで大きな大調和になるわけです。ただ自己主張をしているのではない。特殊性において、キリストが現れる。それが大調和となる。調和のための特殊性だから。バラバラになるといふのではない。根源は一つである。太陽の光は一つである。それがいろいろな花になる。全部、ユリだつたらどうにもならん。

### ●キリストさま、万歳！

ルカ伝24章の終りは、このキリストの盛んなる霊体に、

「これなるかな、キリストさま、万歳！」

と、そういう気持で読まなければダメだよ、こういうところは。

「ずいぶん不思議なことが書いてあるな。一体、こんなことがあるんだろうか」

なんてやつているうちはダメなんだ。あらゆる医学を超越している世界だ。物理の世界も超越している。なにしろ、湖の上を歩いて渡つてくるような人だから。その後、海を歩いて渡つたひとがいるかね。いないね。舟の中にペテロを引き上げて、

「鎮まれ！」<sup>しず</sup>

と言えば、嵐が静まつてしまふんだから、大変な人だよ、正直。あなた方、ぶつ倒れないですか、そういうのを読んで。

「参りました！」

と言つて、本当にぶつ倒れてごらん。聖霊が来るから、ああ、その時に。いい加減な気持で読んでいたらダメですよ。あたまで読んでいたらダメ。

棟方志功の絵が凄くなつたのは、そういう宗教の世界に入って、

「私の中に宗教が生きている」

と言ひ出した。目なんて近眼だつて何だつていい。彼がグーツと書いている姿はまるで火のようだものな。形なんかどうだつていいんだ。絵が生きているかと。左甚五郎<sup>じんごろう</sup>だつてそう。書いた鼠が動き出したという。

### ●福音の証者

とにかく、あなた方は本当にこの福音の証者として行つてくださいますよ。もうなんのかの考えることはないんだ、ひとつも。そして、もし教えているのなら、学生や生徒諸君にこれを伝えなければ。遠慮することはない。マンガばかり読んでいるようなこの日本の国は精神的に滅びに向かつている。大体、電車の中で見ていると、ぶ厚なあゝのマンガの本ばつ



かり見ている。なんだ、あれは。全くまあ嫌になつてしまうね。一番日本はダメなんではないかな、本当のところ。

日本の教育なんていったって、やっと、

「偏差値なんか問題にするな」

というふうな事になってきた。私は中学・高校の校長をしているときに、偏差値なんか何だか知らなかった。そんなものは問題にしなかったから。生徒に、

「お前はどこの学校でなければ、受けてはいけない」

だのと、勝手に品定めなんかして、冗談ではない。やっと、この頃少しずつ本当のことに気がつき始めたようだ。

もうあなた方は遠慮することはないんですよ。御霊の力で、光でもつてものを言っていれば、相手はみんな承服してしまうんだから。

「なにかしらんが、あれは本ものだな」

と。本当の権威をもつて、それが人を救っていく道なんだからね。

## ● 祈り

それでは祈ります。驚くべき、霊的な生命を、永遠の生命を持ち給うところの主さま。あなたの十字架の贖いの死を通し、三日目に必ず甦るとの預言のとおり、霊体として甦り給い、すべての者を驚嘆驚倒せしめ、歴史を二つに割るところの驚くべきことを現じ給うたところの主さま。この日、あなたを私たちのからだの中にお迎えし、

「われ汝のうち、汝わがうちに」

の現実を給い、ありがとうございます。

かくして、私たちも甦らせられ、あなたの永遠の生命にあずかり、この生命をいかにもして生涯を通して証することが、私たちの人生の目的であることをいよいよ肝に銘じておられます。

今日は、兄弟姉妹たちが遠方から来られまして、ありがとうございます。私たちはあなたにおけるところの、不思議な恵まれた友情をもつて進んで行きます。それぞれの集會がこの日を迎えておりますが、それぞれの所においてあなたの聖名が崇められ、あなたのおん生命にあずかっていることを信じて、聖名を讃え奉ります。

私たちは十字架・聖霊のこの事態を私たちの二焦点として回転して行きます。かくして、人間的なことはどんなに欠陥があろうが、どうであろうが、問題でありませぬ。どうぞ、このあなたを中心として決して崩れないところの事態を証していくことができますように願います。今、心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちの祈りとともに主イエス・キリストの聖名にあつて捧げ奉る。アーメン。

